

ON AIR

NO. 111

放送大学通信 オン・エア

発行月 2013年8月

発行 放送大学

〒261-8586 千葉市美浜区若葉2-11
043-276-5111 (総合受付)



CONTENTS

特集:卒業研究	1
コース横断座談会	6
創立30周年:全国で記念公開講演会開催!	10
叢書感想文コンクール	12
被災地レポート	14
研究室だより	15
2013年度開設改訂科目紹介	16
インフォメーション	20

特集 卒業研究

放送大学の「卒業研究」は、全科履修生が履修できる選択科目です。「選択科目」と言っても、テレビやラジオを通して、講義を受ける科目ではありません。「卒業研究」は、学生の皆さんが、みずからの問題意識によってテーマを決め、論文の構想を練り、文章を綴るといふ、またとない機会です。その素晴らしさの真髓を、ベテラン教員が語り尽くし、その充実感・達成感を、学生の皆さんの体験談とともに、お届けします。

素晴らしい卒業研究

人間と文化コース 教授 青山 昌文



卒業研究は、人生の方向を変えるほどの、大切な意義をもっています。私が、放送大学に専任教員として着任したのが、1984年であり、それ以来、四半世紀以上の長い間、私は、放送大学の卒業研究の指導を行ってきました。

私は、今までに、延べ300人を遙かに超える学生さんの卒業研究のお世話をしています。「延べ」というのは、実は、私のところで、複数の卒業研究をお書きになった方が何人もいらっしゃるからです。私は、もともと「人間の探究」専攻の教員であり、放送大学の組織変更によって、「人間の探究」から「人間と文化」コースへと名称が変わっても、基本的に、同じ学問分野の集団の一員なのですが、ある時、「人間の探究」専攻の学生さんが、私の下で卒業研究をお書きになり、その後、他専攻で放送大学に再入学して、しかし、その専攻を2度目に卒業するときも、卒業研究だけは、テーマを芸術の分野として、私の下で、2つめの卒業研究をお書きになる、ということが、なんどもあったのです。一番多い方は、そのようにして、私の下で、

4つの卒業研究をお書きになりました。

着任当初は、私もまだ30代前半の、放送大学で最も若い教員であり、それまでいた東京大学大学院博士課程の流儀で、かなり、厳格な指導を行っていました。当時、私は、群馬学習センター所属の助教授だったのですが、学問的に厳しい私の指導を受けて、群馬から東京に帰る列車の中で、学問の難しさに途方に暮れていた学生さんがいらして、それを、一緒に乗っていた同じ卒論ゼミの学生さんが、励ましたということもありました。その学生さんは、今から思うと、かなり学問的に厳しかった私の指導にもめげず、立派に、素晴らしい、印象派絵画についての卒業研究を書き上げて、その年の卒業生総代となり、卒業式で学長の前で、卒業生答辞をお読みになっています。

私は、30代で放送大学教員となった後、50代で教授になるまでの間、いろいろな大学から、教授で呼ぶから移ってこい、という誘いを受けたのですが、それらを全て断って放送大学に居続けた最大の理由

は、社会人の学生さんに、論文指導する醍醐味です。他大学ですと、まだ20代の、実社会に出ていない若い人を指導するのですが、放送大学では、既に、プロとして一家をなしている、その道の専門家を相手に、深い、専門的な議論が出来るのです。この点で思い出深いのは、まさに専門性の深い、日本語・英語バイリンガルで文章が印刷された自動車雑誌の編集長の方の卒業研究指導でした。今ならば、大学院で修士論文をお書きになったと思うのですが、当時は、まだ大学院が無く、学部での卒業論文をお書きになり私のところに来られた彼は、イタリアの有名デザイナーのデザインについての、専門的な実に興味深い論文を書かれました。

この専門性に関して、上記の点とは異なる方向性をもっている話なのですが、忘れられない思い出があります。それは、ラファエッロの素晴らしい絵画作品について卒業研究を書かれた学生さんのケースで、彼女は、イタリア料理のレストランをご夫婦で経営されていたのですが、私の下でラファエッロについて書いてゆく内に、イタリアルネサンス芸術の魅力に更に引き込まれて行き、立派な卒業研究を書かれて、その年の卒業生総代となり、卒業生答辞を

読まれた後、イタリア芸術への熱い思いに導かれて、レストランを一時ご主人に任せて、イタリアに旅発ってゆかれたのでした。当時の放送大学学園理事長が、卒業生答辞に感動されて、彼女のイタリア料理レストランに、食事に行かれたのも懐かしい思い出ですが、専門のお仕事を一時的にせよ離れてイタリア芸術の世界に更に深く入ってゆきたいとお思になるほど、芸術の魅力は深く、大きいのです。

このように、放送大学における卒業研究は、人生の方向を変えるほどの、大切な意義をもっているのです。それは、確かに、かなり、厳しい、苦勞の多い執筆作業であり、半年以上にわたって、何十冊もの学問的書物や多数の研究論文を読まねばならないものであって、家庭や会社で極めてお忙しい家事やお仕事をなさっている方にとっては、大変な時間と労力を費やさなければならないものなのですが、しかし、その大変なご苦勞の果てには、人生において、滅多に経験できないほどの、素晴らしい達成感・高揚感をもたらす、深い発見に満ちた世界が待っているのです。是非、皆様も、この、深い発見の喜びを、味わってみてください。

私と卒業研究 ①

生活と福祉コース 白旗 寛之 (2012年度卒業・現選科履修生)

私は昨年度、放送大学全科履修生「生活と福祉コース」において、卒業研究を履修いたしました。研究テーマは「高齢者介護をめぐる殺人・心中事件における男性家族介護者にみられる、身体的・精神的・社会的特徴」として、在宅において高齢者介護を行っている男性家族介護者にみられる特徴を、高齢者介護においておそらく最も悲惨極まりない、そして現実に発生している、介護をめぐる殺人・心中事件のなかに求めました。どこからどのようにみても、重く、暗くそして殺伐とした研究課題でしたが、私にとって決して他人事として突き放して考えることができない問題でもあり、そういった意味では、社会で発生しつつある問題と、自分自身の暮らしを結びつけて、そこから導き出した研究テーマであったと思います。

私はこの研究テーマを卒業研究のみで終わりにせ

ず、卒業後も続けてゆこうと考えていました。そのためにはこのテーマを俯瞰して問題の特徴を明らかにし、そこに潜在している課題を検討していく必要があると考えました。私は看護師ですが、これを行うために敢えて「看護学」という枠組みを離れ、特定の学問領域の枠にとらわれることなく研究をすすめていくという姿勢をとりました。しかし、そのような姿勢をとることは、一方では常に学問的な視座から乖離する懸念がありましたが、その点は指導の先生からのご教授を賜ることで、正していただくことができたと考えております。このような研究のすすめ方ができるのは、放送大学ならではの思いです。



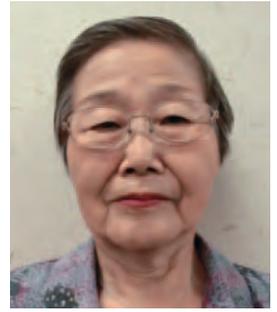
私と卒業研究②

心理と教育コース 人見 麗子 (1989年度卒業・旧発達と教育専攻・現選科履修生)

私は第1期生で卒業研究は当時「専攻特論」といわれ、必修だった。研究テーマは「ハヴィガーストを援用して発達課題を考える」合宿形式の演習(ゼミ)や個別指導を受けながら書き上げたときは望外の喜びであり、「目から鱗」の感じであった。研究報告書(論文)執筆過程で学んだことを挙げると、論文構成にはルールがあり、それに沿って記述する必要がある。資料の収集は、選択と整理の余地を残す必要があり、自分の能力を過信せず、研究に割ける時間(当時医療関係の仕事をしていた)も考え実行可能なテーマを選ぶことが重要であることなど。そして、わかりやすく記述・表現することの難しさや疑問を持ち追求・探求することにより、研究を深めることができることを実感し、懐疑心や問題意識をもつことが研究に直結することを痛感した。

疑問を解くうちに、調べることの楽しさや面白さを見

出し、好奇心が刺激され次々と意欲が湧いてくる。この繰り返しで新しい発見があり、この体験に触発されて修士課程(大阪教育大学大学院)に進むこともできた。現在も京都市内の大学院のゼミや研究会に参加し研究・調査を続けられるのも、「専攻特論」に取り組んだからだと思う。何事も興味や楽しさがなければ続かない。特に研究には楽しさが必要である。座右の銘の論語擁也編「之を知る者はこれを好む者に如かず、これを好む者はこれを楽しむ者に如かず」があり、楽しみながら研究や学びができるようになり、グランドスラム(学部の全コースを卒業)を得ることができたのは、大きな喜びであった。



私と卒業研究③

社会と産業コース 吉村 由紀 (2012年度卒業・現自然と環境コース全科履修生)

これまで、私はその時に応じ関心のある科目を自由に履修し、知識を得る事を楽しんできました。このような中、世間では「デフレ」という言葉が飛び交っていましたが、日々の生活では物価が下がっているという実感はありませんでした。そのことに違和感を覚えるようになり、なぜそう感じるのかを調べてみたくなりました。そして、放送大学や季刊誌「家計経済研究」などで家計の役割について執筆されていた坂井先生のご指導をいただきたいと坂井ゼミへ入りました。

ゼミが開始して間もなく体調を崩し、卒業研究をやめてしまおうと思ったことがあります。しかし、学友の仕事・子育てをしながら真摯に卒業研究に取り組んでいる姿に、励まされました。一つのテーマについて、見方(コース)を変えて持続研究している学友もいて、感動しました。卒業研究をやめて後悔しないように、でも「やれるところまででいいから」と、自ら言い聞かせ続けました。

12月には卒業研究報告会があり、終えた時には安堵と達成感を味わうことができました。卒業研究を

する醍醐味は、疑問に思ったことが明確になることと、この達成感にあるように思います。

ご指導・ご支援していただいた坂井先生始めゼミの皆様には深謝しております。そして、家人はよき理解者でした。これからも、よろしく願います。



私と卒業研究 ④

人間と文化コース 横山 深雪 (2012年度卒業)

「書くこと、は、とても孤独な作業でした。

誰かに語りかけるつもりで書いたとしても誰が読んでくれるかもわからないし、論文形式として仕上げるべき文章なのに、何をどう書いていいのかわからない、何を書いているのか自分でもわからなくなるばかりでしたから。

それでも学部の最後を卒業研究報告書という形で締め括りたいと考えたのは、やはり自分のところが一番表現しやすいかたちなのではないかと考えたからです。放送大学に入るきっかけともなった自分の厭世的な気持ちに対する自分なりのこたえをだしてみたかったからです。自分なりに紆余曲折しながら学んできた過程そのものがなんであったのかが論文というかたちに残すことによってみえてくるのではないだろうか、そして、それによって、また一歩前に踏み出せるのではないかと思ったのです。

書くことはとても孤独な作業であり、とても個人的な作業でした。

しかし、書いたことで指導教員である青山先生、金山先生、ゼミ生たちとの繋がりが芽生えたことも忘れら

れません。青山先生、ありがとうございました。

また、この掲載写真は学位記授与式の際に、横浜国立大学の小宮先生とまなび〜



ちゃんと一緒に撮ったものです。先生には面接授業等でディレタンのあり方、また参考文献なども紹介していただきました。とても感謝しています。

それから、最後になりますが、わたしはfacebookの「放送大学☆卒業研究、グループでサブ管理人をしています。学長や客員教授、全国の放送大学生が参加していますので、これから履修されようか迷っている方、卒業研究にご興味のある方はぜひ気軽に参加してください。お待ちしております。

私と卒業研究 ⑤

自然と環境コース 渡辺 優 (2012年度卒業・現選科履修生)

常日頃から山口県の山々が竹林に覆われ荒れていくことに懸念していた私は、タケのことをもっと知り、何らかの対策を見出したいと思い、その調査研究を卒業研究で取り組んでみることにしました。そして、テーマを「山口県における竹林の現状と将来予測」とし、竹林の面積や分布・拡大状況からタケの生態特性、資源としての特性、竹林拡大に伴う問題、拡大の拡大速度やメカニズムなどを調査研究し、これらから現状のまま推移した場合の将来予測と竹林拡大を止める対策を考察して、卒業研究論文に纏めました。

卒業研究履修を決意したときは、論文として書き上げることが出来るのだろうかという不安ばかりでした。また、履修期間は論文が書けず心が折れそうになる時もありましたが、当時の山口学習センター松浦所長や指導教員である梶原教授のご指導や叱咤激

励により、何とか完成させ単位を取得することが出来ました。そして、卒業研究を終えたときは、放送授業や面接授業だけでは得られない、充実感に溢れていました。また、卒業研究で得られた知



見はタケに関するものだけでなく、論文の書き方や情報データの入手から分析・評価方法など多くの知識を得ることが出来ました。しかし、タケに関してはまだ分からないところが多くあり、竹林拡大防止策もまだまだ検討する必要があると思っています。したがって、今回の経験を生かし、更なる調査研究を進めるため現在は大学院への進学を視野に入れています。

卒業研究 Q & A

卒業研究とは？

- ① **選択科目** 全科履修生が履修できる選択科目です。(履修しなくても卒業できます。)
- ② **通年科目** 履修期間は4月から1年間です。
- ③ **6単位修得** 履修し合格すると自コース(専攻)の専門科目6単位(放送授業3単位・面接授業3単位)が修得できます。
- ④ **直接指導** 指導教員から直接指導を受け「卒業研究報告書」を作成します。指導方法は個人面談、ゼミ形式、E-mail、WEB会議システムを使った遠隔指導など様々です。

履修するには？

- ① **前年に申請が必要** 履修前年度の8月に申請書を提出する必要があります。申請書には研究テーマ、履修の動機、履修計画などの記入欄があるので事前に準備が必要です。
- ② **申請条件があります** 申請条件を満たした方のみ申請できます。

申請条件

- **全科履修生として2年以上在籍していること**
 - **62単位以上修得済みであること**
- ※3年次編入は2年、2年次編入は1年、在籍したとみなします。
 ※第1学期入学の場合は特例もあります。申請条件については必ず最新の卒業研究履修の手引(別冊)をご確認ください。
- ③ **申請書の審査があります** 申請書を審査のうえ履修を認められれば、履修が可能です。

申請～履修の流れ (太字は学生の日程)

履修前年度	6月～	卒業研究履修の手引を入手 申請書作成等に向けて質問票の活用、必要な面談を所定の時期に行う
	8月下旬	卒業研究申請書の提出 申請書を各コースで審査 ※なお平成26年度の履修を希望する場合は、【平成25年8月19日～27日】が申請期間となります。
	11月中旬	履修可否仮決定通知の送付
	11月下旬～	必要があれば卒業研究再申請書を提出
	1月中旬	履修可否決定通知の送付
履修年度	2月～3月	科目登録・授業料納入を行う
	4月中旬	履修許可通知の発送
	4月下旬	教員からの連絡により履修開始
	11月初旬	卒業研究報告書(論文)の提出
	11月下旬～	論文未提出者の再履修申請期間
	12月～	論文審査・面接審査
	2月下旬	成績通知
	2月下旬	不合格者の再履修申請

指導教員はどのように決まる？

提出された申請書をもとに大学で審査し、履修の可否と指導教員を決定します。指導教員は放送大学専任教員を基本としますが、本部から遠いなどの理由により学習センターの客員教員や近隣大学の教員の指導を受けることもできます。申請の際、申請書に希望順位を書いて提出します。※希望通りにならない場合もあります。

● 本部専任教員

放送大学の先生を指します。面接指導の多くは東京地区で行われることが多いですが、E-mailやWEB会議システム等を利用して、遠隔地にいながら指導を受ける場合もあります。

● 所属学習センターの教員または近隣大学の教員

学習センターの客員教員など専任教員以外の先生を指します。希望する場合には、必ず申請書提出前に「所属学習センター所長面談」を受ける必要があります。

過去の卒業研究報告書閲覧をしてみよう！

キャンパス・ネットワーク・ホームページから、過去5年間の卒業研究報告書のテーマや一部の論文を閲覧することができます。過去の履修者が取組んだテーマや、報告書全文を参考にしたい場合は閲覧サイトにアクセスしてみてください。(ログイン後、学習情報→卒業研究→卒業研究報告書閲覧)

くわしくは、「卒業研究履修の手引」、「卒業研究履修の手引(別冊)」をご確認ください。

毎年6月に最新版を各学習センターで入手できます。また、キャンパス・ネットワーク・ホームページでも確認することができます。

(ログイン後→学習情報→卒業研究→卒業研究履修の手引)

卒業研究の履修方法のほか、各コース専任教員の専門領域、指導方針など情報満載！

キャンパス・ネットワーク・ホームページ <https://www.campus.ouj.ac.jp/ouj/login/index.htm>



「個」と「集団」—それぞれの得失

松本 忠夫 教授(生態学/環境生物学)

田城 孝雄 教授(内科学/公衆衛生学/地域医療学)

コーディネーター

岩永 雅也 教授(教育社会学/生涯学習)



(左から)田城 孝雄教授、岩永 雅也教授、松本 忠夫教授

「ソーシャル・キャピタル(社会関係資本、以下SC)」をメインテーマに、コースを超えて先生方に様々な切り口でご議論いただく「コース横断座談会」。前回の「人と人との結びつき」の議論を一步進めて、今回は「個」と「集団」についてお話いただきました。

※本文中は敬称略とさせていただきます。

社会性昆虫=「個」の利他行動によって支えられた「集団」

岩永 SCというと、どうしても社会科学的な領域で解釈されがちです。今回、私以外は理系の先生方です。SCを自然科学的側面から捉えたお話がお伺いできると幸いです。まず、松本先生、社会性昆虫の研究がご専門でいらっしゃるようですが、簡単にその内容をご紹介いただきながら、虫たちの「個」と「集団」についてお話を。

松本 私は、社会性昆虫の中でも主にシロアリについて研究しています。社会性昆虫にはこのシロアリ類のほかに、アリ類やハチ類もいます。ではなぜ彼らは「社会性昆虫」と呼ばれるのか。それは、集団を形成しそこには階層があるという、さながら人間社会と同じという意味でこう呼びますが、正確には「大家族昆虫」と呼んだ方がふさわしいでしょう。シロアリは、王と女王が交尾して産卵を繰り返します。生まれた子どもには、生殖のみを行う少数の個体と生殖を行わない多数の個体があります。彼らは成虫になっても親元を離れず、次々と生まれる子どもを共同保育します。女王は寿命が長く生殖能力に長けているため、同じ母親DNAを持つ個体数は何世代も重なって増えていきます。何十年もかけて数百万、数千万の大きな集団になります。熱帯には巨大な蟻塚がありますが、その殆ど

はシロアリによるものです。アリ類も含めて、まさに大地に満ちよ、という感じで至るところにあります。どうしてこう進化したのか、その謎解きをしたいとの思いで40数年間、熱帯域のあちこちに足を運んで調べてきました。この両者は食う・食われるの関係でがっぷりと組み合っています。シロアリは植物の枯死体を餌とし、アリはそのシロアリを捕食します。両者は、集団対集団の世界を形成しながら、おそらく地球の陸上で最も繁栄を極めている動物と言えるでしょう。シロアリの祖先はゴキブリです。ゴキブリは単独性で子どもを育てるといことはしません。アリ類はハチが羽を落としたもので、両者とも進化の過程で集団化を果たしました。

岩永 社会性昆虫の世界では、あるグループは子どもの面倒を見る、あるグループは巣を作る、というように分業が進んでいますね。

松本 シロアリの分業といえば、働くだけのワーカー、敵から巣を防衛するソルジャーがよく知られており、形態も性質も異なります。中には、餌運び専門の大ワーカー、餌嚙り専門の小ワーカー、そしてその両方を行う中ワーカー



松本 忠夫 教授

と、さらに細かく役割分担している種もいます。このような分化は個体発生において遺伝子が発現する中で起きます。それだけでなく餌のやりとりや個体から放出されるフェロモンが他個体の行動や発育に大きく関わっていることが知られています。

岩永 シロアリやアリが大きく繁栄しているというのは、単独あるいは小家族だけで暮らす生物より競争力があるからでしょうか。

松本 その通りです。個体そのものはごくごくひ弱な存在で、集団から離れることは死を意味します。が、集団化することで巨大な巣を造ったり、行列をなして遠距離に採餌したり、キノコ栽培をしたりと大きな相乗力を発揮します。その集団行動にはリーダーがいるわけではありません。集団レベルでの自己組織化がなされたということが繁栄のポイントだと思います。また、ワーカーもソルジャーも自らの子を残すことなく一生を終えます。天敵のアリに向かうとき、ソルジャーは、時にはワーカーも加わり果敢に闘います。中には腹部を破裂させ敵に毒物質を浴びせる“自爆”行動をとる種もいます。つまり、社会性昆虫における「集団」は、「個」の完全な利他行動の集合によって支えられていると言えます。

岩永 地球上には昆虫が我々より先に登場しました。集団化という点ではシロアリやアリが先輩です。我々ヒトは、それをアタマで考え、近いカタチを獲得したんですね。

松本 ただ、その道のりはだいぶ違います。決定的に違うのは「文化の伝承」です。人間は脳を発達させ「学習」しながら、子どもに、その子どもはまたその子どもに、と文化を伝承・蓄積していった。しかし、虫の世界にはそれがありません。遺伝子を通じてのみの伝達です。

生命維持に必要な社会性、そして「互助」という考え方

岩永 それでは、人間が「集団」として或いは「個」として生きていくために必要な健康や生命の維持、といった点に話を移したいと思います。田城先生のご専門は、集団で、つまり社会で健康や生命を維持することについての研究、と考えてよろしいでしょうか。

田城 その前に簡単な自己紹介を。私は、保健学科と

医学科を出て、内科医として勤務する傍ら消化器内視鏡学を研究、その後米国で分子生物学を学びました。そして日本に戻り、大学附属病院では国内初の退院支援を行う部署、東大病院医療社会福祉部



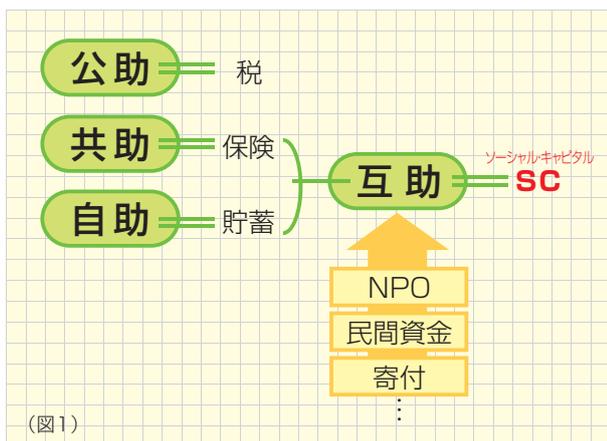
田城 孝雄 教授

の立ち上げに参加したことから少し方向性が変わりました。現在はその延長上の、在宅医療や地域の保健・医療・介護・福祉の連携に関して体制作りのお手伝いをしております。実は最近、この地域医療連携の分野でもSCという言葉が急に言われ始めています。このSCを枕詞にして言われていることの一つは、社会的サポートを受けている人と受けていない人との間には死亡率が大きく違うということです。心筋梗塞について、1,000人以上を追跡調査した研究では、9年を経た時点での孤立者の死亡率が50%であったのに対し、家族がいたり友人がいたりという人たちの死亡率は18%で、3倍近い開きがありました。ザックリとですが、孤立している人の死亡率はそうでない人に比べると2倍ほど高いと理解しています。この社会性が弱く孤立しがちな人は、どちらかと言うと経済的弱者で、社会格差の問題は健康や医療にもくっきりと暗い影を落としています。

岩永 社会性ということが、人の命にまで影響している、と。シロアリやアリは、「集団」から離れて「個」になると生き延びられないとお話もありましたが、人間にとっても社会性というのは健康や生命の維持に必要なもののようなのです。私が社会学を学び始めたときに読んだ本の一つにエミール・デュルケムの「自殺論」がありますが、その中で、彼はデータを駆使して精査し、集団ごとに自殺率が異なることを突き止めました。従来の失恋や破産、病気といった個々人の事情から自殺を説明するのではなく、自殺者がどのような集団に属していたかという社会的要因にそれを求めたのです。具体的には、プロテスタントの方がカトリックより、農村地域より都市部の方が自殺率が高く、逆に大家族で暮らしているグループは低い等々です。これは自殺という一断片ではありますが、田城先

生の、孤立者が死亡率が高いという話にも通底すると思います。さて、「個」と「集団」について、私の専門である社会学に引きつけて少し時代背景について触れたいと思います。坂井先生と「格差社会と新自由主義」という番組を作りましたが、それは…「集団」を中心に据えて集団的な行動パターンや価値といったものに重きを置いてきた戦後日本は、1980年代半ばを境に競争に主眼を置く「新自由主義」に舵を大きく切った。それまで当たり前と考えられていた平等主義とか中流社会といったものが否定的に見られるようになり、やがて「新自由主義」は勝者とともに敗者をも生み、格差は後戻りが難しいところまで広がった、それがここ10年。そこで、今、戦後間もない「集団」重視ではない、とって「新自由主義」による行きすぎた「個」中心の社会でもないということで、新しい「個」と「集団」のあり方が模索されている…といった内容です。田城先生の研究分野も、地域医療連携における「集団」と「個」のあり方を探るものだと思いますがいかがでしょう。…例えば社会保障制度は、全て国に面倒を見てもらうという考え方はやめて自己責任で備えようという議論もあります。

田城 ホワイトボードを使って説明してみましょう(図1)。社会保障は「公助」「共助」「自助」により形作られています。100%正しいかは分かりませんが、「公助」は所得の再配分機能を持つ「税」です。「共助」は、“みんなで”ですから「保険」と言えるでしょう。「自助」は“自分のことは自分で”ですから「貯蓄」です。そして、この「共助」と「自助」の中間に位置づけられるのが「互助」で、おそらくはSCの概念に、そしてかつて出された「新しい公共」という概念にも近いものでしょう。この「互助」には、NPO



(図1)

やボランティア活動、民間資金活用による公共サービスの提供等が考えられますが、SCを測る因子の一つとされている「寄付」も含まれ、実際、私が委員として関わっている世田谷区地域保健福祉審議会でも「寄付文化を創り出そう」と提唱し始めています。確かに、何でもかんでも「公助」=「税」に頼る時代から変わりつつあるのかもしれませんが。一部には、年金も自分で貯蓄すべき、という「自助」偏重の考え方もありますが、やはり「互助」…寄付や民間資金を取り入れた「互助」というものが、さまざまな政策課題を解く鍵になると考えます。私見ですが、年金問題等で問題になっている世代間の不公平感についても、例えば団塊



岩永 雅也 教授

世代内の互助といったものがその解消の糸口になりうるかな、と。

岩永 こういう話でいつも私は、基本は“愛”じゃないかと思っています。「自助」は、自分や家族が対象ですからほぼ無条件に“愛”がある。

「互助」は、助けよう、力になろう、という相手の顔を見つめながらの確かな“愛”がある。共助は、対象が広がるが、それでも一定の“愛”はある。例えば保険。身も知らない人たちと同じ保険に入って助け合う。そこには、保険金が無駄に使われない、詐取されない、といった信頼…一定の“愛”がないと成り立たない。そして「公助」。国民の義務としての納税に“愛”はあるのか…それは人に対しての自然発生的な“愛”ではなく、“愛国心”のような社会化によって形成される愛なのかもしれない…そんなことも考えます。ところで、シロアリやアリに“愛”はあるのでしょうか。子どもの頃ミツバチを飼っていて、大スズメバチがくと命も省みず皆で抱きついて体温で殺してしまう。“愛”があるという気がしないでもない。

松本 虫の世界では「個性」は全く尊重されません。一匹一匹は「集団全体」の部品でしかない。こんな“愛のない世界”は人間においては許されません。虫たちに求められる最大の論理というのは、ゲノムに書かれた情報を後世に伝えて行く、このただ1点です。さらに社会性昆虫の場合は、伝えるのは女王や王など

一部の個体だけ。残りの膨大な個体は配偶すらできない。ひたすら働き、ただ果敢に敵に向かって行く。ある意味、極端な「全体主義」です。ですから人間社会に置き換えてもあまり参考になりません。

地域医療連携のコンセプトとなりうる 「個」と「集団」をつなぐSC

岩永 あるいくつかの国では独裁が続いており、「個」と「集団」はそちらに行く危険を絶えず孕んでいます。人間は「集団」の合意を大切に作る生物です。それは「個」が犠牲になるというリスクを包含していますが、人間はその作業を通してしか社会を維持していけない。私は教育を研究対象にしているので何事も社会化（socialization）とか教育とかに結びつけて考えてしまうのですが、人間は、上が銃剣の力で国民を動かすリスクとコストを歴史の中で繰り返して学びました。そして、教育によって社会を維持して行く方向に持っていくという別なやり方を獲得しました。ところが、この社会化とか教育があまりに行きすぎると、もっと自由でいい、といった揺り戻しが来ます。「個」と「集団」のどちらにどの程度の重きを置くかというバランスの問題ですが、どの状態が最適か、というのはなかなか見えてこない。このことは医療や福祉にも言えることではないですか。

田城 SCのよいところは、蓄積できる資産だということ。昨日より今日、今日より明日とうまく環境を整えて努力すれば資産は増え、引き継がれます。私たち、保健・医療・福祉・介護に関わる人間にとって、希望を持たせるコンセプトの一つにSCがあります。そこには社会格差、少子高齢化等の壁が立ちますが、SCや「互助」はキーワードに成り得ます。昔は、お隣どうして醤油を貸し借りしたり、寝たきりの人が隣家にいたら5人作るも6人作るも同じだからとおかずを分けてあげたりしました。相互の信頼感がありました。いい意味でのお節介です。SCに関する多くの研究に“相手を信頼できますか？”という設問があり、信頼し合える割合が高いほど、SCが高く、死亡率が低い、犯罪が起こりにくいとされています。先ほど経済的弱者が孤立しやすい、という話をしましたが、互いの信頼感を核にボランティア、寄付文化といった「互助」が加われば、お互いに支え合う、という連

帯・連携の土壤が育まれるものと期待しています。ですから、「個」と「集団」のバランスの問題はありますが、そこに信頼や「互助」といった作用を働かせれば、両者の乖離を緩和させ、いい方向に進むのではないかと考えています。その象徴的な例として、兵庫県立柏原病院の「小児科を守る会」のお話を紹介させていただきます。その小児科は、先生5人が2人に、2人が1人になり、廃科の危機にありました。そのことを新聞で知った子育て中のお母さんたちが記者の呼びかけで座談会を行います。そして、自分たちの安易な受診が先生たちの過酷な勤務実態を生んでいたことを知り、「辞めんといて」とはとても言えない、行政任せにせず自分たちで小児科を守ろうと会を立ち上げました。そして、①コンビニ受診はしない、②かかりつけ医を持つ、③先生に感謝の気持ちを伝えよう、と決めたのです。コンビニ受診をしない、というのは決して“我慢する”という意味ではありません。本当に必要な人が必要な時に受診できるよう、症状に応じて病院と診療所（かかりつけ医）を使い分けよう、というものです。その活動は行政をも動かし、やがて小児科は“復活”しましたが、話はそれだけではありません。お母さんたちは、自分たちが守りたいのはふるさとの地域医療だと気づき、その活動は、PTAやご主人を通じてさまざまな地域医療分野に、さらに親世代を通じて介護分野にまで及んだのです。まさにSCは蓄積される、という好例です。

岩永 今のお話を伺って、お金は誰が使ってもお金ですが、SCは使う人によって大きくその価値を高める、相互に響き合って1+1=2以上のものになるものだなと思ひ至りました。さて、まだまだ話は尽きないのですが時間が来てしまいました。この続きは、学生の皆さんの活発な議論に譲りたいと思います。本日はありがとうございました。



全国で記念公開講演会開催!



創立30周年を記念して、30周年記念公開講演会を全国の学習センターで開催しています。すでに開催した公開講演会のレポートと、これから開催する公開講演会をご案内します。ぜひご参加ください。

開催報告

これまでに開催した公開講演会の一部をご紹介します。

東京文京学習センター

平成25年7/22(月)「学び続ける力」池上彰東京工業大学教授 × 岡部洋一放送大学長

東京工業大学リベラルアーツセンター教授の池上彰先生の基調講演「学び続ける力」の後、岡部学長と「教養(リベラルアーツ)」についての対談を公開講座形式でおこない、会場は約300名の参加者の方で満席となりました。

基調講演では、池上先生の話術の巧みさ、お話の面白さに、参加者の皆さんは聞き入っていました。その後、岡部学長との対談では和やかなムードの中、今求められている「教養」について話し合われました。「すぐに役立つ知識は、すぐに役に立たなくなる」という話があり、「教養」こそしっかり身につけておくことが大切であること、それは後に様々な知識と結びつき、さらに知識が広がっていくことや、いくつになっても学び続け、好奇心(curiosity)を持ち続けることが『学び続ける力』となるのでは、と、それぞれの立場で熱心に語り合われました。



東京足立学習センター

平成25年5/25(土)・26(日)「八丈島の薬草」「民法って何!?!」

八丈町の後援を得て、放送大学30周年・東京足立SC20周年記念公開講演会in八丈島と題して、『八丈島の薬草』(佐竹元吉 元お茶の水女子大学教授)、『民法って何!?!』(山田勝重 客員教授)の2つの講演会を八丈島で開催しました。島嶼部のうち八丈島、青ヶ島、小笠原は東京足立SCの管轄であり、東京都での離島人口が多く、交通の便が良い八丈島を候補としました。

当日は、島の人口8,000人のところ延べ100人近くの参加があり盛況でした。卒業生の参加もあり、2つの講演は身近にある話で興味深かったようで、講演終了後も懇談が行われました。



秋田学習センター

平成25年6/1(土)「対人コミュニケーションについて考える—より良い対人関係のために—」

6月1日(土)に放送大学創立30周年記念行事の一環として、「対人コミュニケーションについて考える—より良い対人関係のために—」と題して柴田健客員教授(秋田大学教育文化学部教授)による公開講演会を開催しました。当日は、定員50名に対して66名の参加申込みがあり、講義室の仕切りを外して使用する盛況となりました。

また、柴田先生のパワーポイントを用いたわかりやすい講演に加え、ペアやグループを作ったワークなど終始和やかなうちに終演時間をむかえました。



開催予告

30周年記念公開講演会の一部をご紹介します。
くわしくは放送大学ホームページをご覧ください。

放送大学 30周年 http://www.ouj.ac.jp/hp/30th_anniversary/event.html

※中止や延期などになる場合があります。事前に各学習センターにご確認ください。※2013年7月現在の予定です。

北海道学習センター

平成25年 **9/14(土)** 15:00~17:00

自分らしい生き方を創る ～ストレスを超えて～

講師/佐藤 公治(北海道大学名誉教授)
場所/とちかちプラザ
定員/70名

事前
申込制

青森学習センター

平成25年 **10/26(土)・27(日)** 各日とも
13:30~15:00

江戸の話しことばと文化 —『四谷怪談』に見る言語生活

講師/藁科 勝之(放送大学青森学習センター所長)
場所/弘前大学コラボ弘大 八甲田ホール
定員/100名

愛知学習センター

平成25年 **9/7(土)** 13:30~15:00

街にクールスポットを! —環境負荷の小さい快適なまちづくり—

講師/梅干野 晃(放送大学教授、
東京工業大学連携教授・名誉教授)
場所/中京大学ヤマテホール
定員/100名

三重学習センター

平成25年 **10/5(土)** 14:00~16:00

はじめて学ぶ資源環境学 —みんなで考えよう21世紀の社会—

講師/久松 眞(放送大学三重学習センター客員教授、
三重大学名誉教授)
場所/三重県総合文化センター内三重県生涯学習センター
4階小研修室
定員/20名

事前
申込制

新潟学習センター

平成25年 **10/12(土)** 14:00~15:30

無縁化する社会を どう超えるか ～高齢化と人口減少する社会の今～

講師/宮本 みち子(放送大学教授)
場所/新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」
定員/98名

滋賀学習センター

平成25年 **11/14(木)** 13:30~15:00

こころの病と健康管理 ～ストレス・マネジメントを中心に～

講師/瀧川 薫(放送大学滋賀学習センター客員教授、
滋賀医科大学教授)
場所/大津市生涯学習センター
定員/400名

大分学習センター

平成25年 **11/9(土)** 13:30~15:00

マヤ文明入門 ～「マヤの予言」とは何だったのか?～

講師/佐藤 孝裕(別府大学教授)
場所/大分県立図書館
定員/100名

事前
申込制



2012
年度

放送大学叢書 感想文コンクール



放送大学叢書感想文コンクール実行委員長
心理と教育コース 准教授

森 津 太 子



放送大学叢書は、既に閉講となった授業科目の中から、社会的な意義が高く、いまなおその輝きが失われていないと思われるものを、著者自らの手によって再生させ、世に送り出しているものです。2013年6月現在、全21冊の叢書が刊行されていますが、放送大学の在学生、卒業生はもちろんのこと、これまで放送大学には縁がなかったという方にも好評を博しており、放送大学が醸成してきた豊かな教養を広く提供する場となっています。

放送大学叢書感想文コンクールは、この優れた叢書の数々をより多くの人に手にとっていただきたいという願いから始まりました。しかし読者に、叢書を読んで感じたこと、考えたことを、文章というかたちで放送大学に還元して頂くことは、期せずして、叢書を提供する側である我々放送大学教員にとっても、大きな刺激となっています。第3回目を迎えた今回のコンクールでも、審査はよい意味で大変骨が折れる作業でした。最終的に、最優秀賞1篇、優秀賞2篇、佳作2篇を決定しましたが、応募作品全38篇はいずれも甲乙がつけがたく、またどの作品も応募者の「生きざま」を透かし見るができるような力作で読み応えがありました。

一般に感想文というと、「面白かった」「感動した」といった、まさしく“感想”が脈絡なく書き連ねられたものが多いように思います。あるいはそれとは対照的に、ただ本の内容が要約されただけの“感想文”に出会うこともあります。しかし今回、読ませていただいた感想文は、いずれも、著者が言わんとしていることを真正面に見据えながらも、自らの立ち位置を崩すことなく、むしろ自らの視点で著者の主張を再解釈したり、反対に著者の視点を通じて自らの経験を振り

返ったりしたもので、そのような一般的な感想文とは一線を画すものでした。放送大学叢書が皆さんの豊かな人生の一翼を担っているように感じられ、審査者一同、大変感銘を受けました。以下、簡単に講評を記します。

受賞者	タイトル	対象叢書
最優秀賞		
高木 順一	『〈ころ〉で視る・知る・理解する』を読んで	『〈ころ〉で視る・知る・理解する』
優秀賞		
西村 将司	『徒然草をどう読むか』を読んで	『徒然草をどう読むか』
武田 晃	音楽をより愉しむ	『音楽家はいかに心を描いたか』
佳作		
加藤 光吉	『〈中国思想〉再発見』を読んで	『〈中国思想〉再発見』
玉置 康江	西洋近代絵画の見方・学び方	『西洋近代絵画の見方・学び方』

**最優秀賞：『〈ころ〉で視る・知る・理解する』を読んで
高木 順一さん**

「ころ」、特に「認知」というキーワードに関連するご自身の興味を、本書の内容とうまく関連づけています。一つ一つは独立した異なる興味ながら、それをまとめ上げる構想力が大変素晴らしいと思います。

**優秀賞：『徒然草をどう読むか』を読んで
西村 将司さん**

徒然草に対する思いが、テンポの良い語り口で綴られており、思わず先に読み進めたいくなる、そんな作品です。徒然草に対する著者の専門的な分析を、義母と自分との関係性の中で読み解くことによって、徒然草の解釈が一層、深まっていくさまがうかがえました。

**優秀賞：音楽をより愉しむ
武田 晃さん**

『音楽家はいかに心を描いたか』の読書感想文として書かれた作品です。本書を通じて、音楽を身近に感じるようになった様子がよく著わされていました。また、西洋音楽の解説書である本書での学びが、雅楽を鑑賞した際の考察に生かされている印象的でした。

放送大学叢書について詳しくはホームページをご覧ください。
http://www.ouj.ac.jp/hp/o_itiran/sousyo/index.html

「〈こころ〉で見る・知る・理解する」を読んで



愛知学習センター所属
修士選科生 **高木 順一**

先日、家族が久しぶりに我が家に集まった。末娘が孫娘を連れて来た。二歳になったばかりではあったが、やんちゃで走り回り、片言でもよく喋る。「三つ子の魂百まで」とは言うが、この子は成人する頃に“きょう”を記憶しているのだろうか。

また、私の親族に実はうつ病になり通院しているものがある。はたして、原因は何なのだろうか。これからどうなるのだろうか。

現在、私は放送大学で修士選科生として学んでいるが、今学期は「精神医学特論」を専攻している。それは、うつ病とは何なのか。そもそも精神障害とはどのような歴史を経て来ているのかを知りたかったからだ。

そして、個人的には仏教の教理に興味があり、今は「般若心経」（正確には「仏説摩訶般若波羅蜜多心経」）を勉強している。「悟り」や「空の世界」とは何なのだろうか。

このような疑問に、「〈こころ〉で見る・知る・理解する」は答えている。

まず、「記憶の新たな視点」の章にその答えがある。そこには、人の想起能力というものは記憶現象の質的側面として、構成的になされることが述べられている。しかしながら、最幼児期記憶の検証によると、三歳未満のことは正想起得点ゼロとなってしまふとある。なぜなら、その能力は三歳から四歳以後において長期記憶が急速に発達することによって初めて可能となるからだ。つまり、認知情報というものは、言語の発達によって意味記憶、知識スキーマ、スクリプトの習得へと進み、精緻化リハーサルが可能となった時に、長期記憶として保存されるようになるという。「三つ子の魂百まで」は間違いではなかった。だから、孫娘は将来の時点において、“きょう”を記憶していないことになる。

そもそも、認知とは何なのであろうか。「痴呆症」が「認知症」と呼ばれるようになって久しいが、それは「認知」と言う以上、記憶の想起が関係している。それについて、「ことばの記憶と脳内メカニズム」の章では、長期記憶が脳内の各感覚領野でどのように処理されているのかといった、「大脳機能局在説」を説明した後で、老人性の健忘は「宣言的記憶の解体」が原因であることを教えている。しかしながら、不思議なことに、損なわれた機能が他の部位

で対応することも知られている。それは、脳の高度融通性を示しているように思える。その章での実例として、老妻の痴呆症を二年の看病の後完治させた夫の感動的経験は、そのことを教えているのかもしれない。

「精神医学特論」の本によると、精神医学の精神療法部門において、臨床心理士等との連携がもっと親密になるべき余地が残されているとあった。ある場合は、薬物療法よりも副作用の心配がなく寛解状態が持続する率も大きいようだ。

心理療法については、「カウンセリングと認知の機能」の章の中で、三つの心理療法が取り上げられている。そのうちのひとつ、「認知療法」の項では「抑うつ病」の心理障害について、「心理障害には、考え方や認知の仕方において、ある習慣化した誤りや歪みが含まれていること」（自動思考）があるので、そのような自己否定への沈潜を正すために「短期的心理療法」という療法が開発されてきている。しかしながら、これは治療者の側からの一方的な作業ではなく、患者との共同作業が必要となってくる。つまり解決法を共に考え、自信を取り戻せるように情動的、行動的面に焦点を当てていく療法がとられているのだ。そして、患者自身が「愛されている」ということの自覚から、さらに患者自身が“愛する”ことへの成長を促すものとなっている。いずれにしても、治療者の側の努力は他の療法においても並大抵の苦勞ではないようだ。それは、ある意味で治療者自身の人格の完成や、〈こころ〉の状態が大切な要素となっている。

この本の主題の冒頭には、「〈こころ〉で」と付されているが、それはこの本全体を締めているように感じる。そしてそれを可能とする、「共感」と言う“ことば”が良く出てくる。「共感的理解と主客融合の視点」の章では、そのことにつき、それは「間主観的理解」であり、「二人相互の考え・気持ち・意図を直観的に理解すること」で、「知的のみならず共感的に理解すること」とある。そしてその「共感」の説明・理解の助けとして著者は文学作品を適時に引用されている。

著者のプロフィールによると、心理学だけではなく、文学博士の肩書をお持ちになっておられ、かつ「あとがき」の中でも「本書（の）素材は日常経験や、文学、芸術、医学、あるいは文化人類学などにも手を伸ばし、人間のこころのはたらきの全体像をうかがわがらせることをこころがけた」と書かれている。実際、様々の文学作品を本当に理解するためには、主人公に自己を移入し、経験を「共有」することの必要性が説かれている。そうでなければ、正確な認知・理解ができなくなってしまうのだ。（後略）

この作品の全文はホームページに掲載しています。
http://www.ouj.ac.jp/hp/o_itiran/sousyo/osirase/20130312.html

もう二年半、まだ二年半

生活と福祉コース教授 奈良 由美子

東日本大震災から二年半が経ちました。震災で被害に遭われたかたがたにあらためまして心よりお見舞いを申し上げます。

わたしが震災後にはじめて東北の被災地に入ったのは2011年3月29日でした。自らの専門分野（リスクマネジメント論）の立場から、被災現場の実態をつぶさに把握しなくてはなりません。まだまだ寒風吹きすさぶ沿岸部被災地をまわり、わたしは視覚・嗅覚・聴覚をもって、広域にわたる津波被害の凄まじさを思い知ったのでした。生業の基盤である農地や漁場、まち、そしてひとびとのくらしは壊され、被災地では何もかもが不足していました。

もうひとつ、わたしには東北に行く大きな目的がありました。それは、東北に在住している学生さんをたずねることでした。そのうちのおひとりが宮城県石巻市在住の及川敦子さんです。及川さんは放送大学の全科生としてわたしの研究室で卒業研究を完成させ、すでに放送大学大学院修士全科生の入学試験にも合格されていました。春の大学院進学を待つばかりの3月11日、看護師である及川さんは職場の石巻市立病院で津波被害に遭われたのでした。沿岸部に立地していた同病院は、津波によって周囲も浸水したままとなり4日間完全な孤立状態になってしまいました。その間、及川さんをはじめ病院スタッフのかたがたは命がけで患者さんたちのケアにあたっておられました。ようやく連絡がついた及川さんと石巻市役所で再会できたときの嬉しさと有り難さは、今でも忘れられません。

その後も継続的に東北被災地を訪れています。震災当初は、そのあまりの量に気が遠くな



南三陸町志津川地区—左は2011年3月29日撮影。昭和35年チリ地震津波水位(3.1m)の表示塔が倒れている。右は2013年5月25日撮影。瓦礫は撤去され、まちの再建を待つ。

りそうな瓦礫の山でしたが、それも行くたびに少しずつ、小さくなっていました。

及川さんは

震災後の避難所支援や仮設住宅巡回活動を通して、地域医療を充実させることの必要性を痛感し、2013年5月1日、地元の石巻市にかねてよりの念願であった訪問看護ステーション「てあーて」を立ち上げられました。5月26日に水谷啓子さん（愛知学習センター所属）と一緒に「てあーて」を訪れました。水谷さんはわたしの研究室の大学院修了生であり、現役の保健師です。震災後からゼミ仲間とともに、被災された及川さんたち学友に継続的な支援をされています。地域医療の充実という志を同じにする及川さんと水谷さんが再会を喜び合い語り合う姿に、わたしはあらためて、被災地のこれまでとこれからに思いを馳せました。

あの未曾有の大災害からもう二年半、いいえ、まだ二年半。確かに瓦礫はほぼなくなりましたが、被災地の復旧そして復興はこれからです。住宅の確保、まちの再建、雇用の創出、経済基盤の再構築はこれからの本格化のフェーズとなるでしょう。先日訪れた東北被災地の仮設商店街である店主のかたが、「最近では外からのお客さんが減った。みんなもう震災のことを忘れちゃったのかな」と



話しておられました。これからも被災地の復興に強い関心を寄せてゆきたいと思っています。

訪問看護ステーション「てあーて」にて、及川さん(右)と水谷さん(左)

ICTを利用した価値ある生活環境の創出を目指して

生活と福祉コース・生活健康科学プログラム 准教授 川原 靖弘

ICT(情報通信技術)の発展により情報機器の小型化と通信インフラの拡充が進み、私たちの生活空間においても、その利用が急速に促進されています。その一方で、高齢化に対応しつつ個人が営む生活の価値を重要視するという社会のニーズがあり、ICTの社会実装は慎重に行われる必要があります。

当ゼミでは、そのニーズを視野に入れ、情報技術等を用いて生活環境での人間の状態や周辺環境情報を把握し、生活や住空間を考える研究を扱っています。学生のテーマは、高齢者行動の認識に基づく介護予防のための生活空間デザイン、医療事故防止のための医療機器システム設計、音楽要素の認知に基づく公共空間における音の考察など、生活空間(実験室を出た空間)での技術利用を中心に多岐にわたっています。ゼミは、月に一度、文京学習センターで開催し、研究分野の重なる学生同士での情報交換も活発に行えるよう心掛けております。

●学生の声●

私は理学療法士として患者様のリハビリテーション

に従事する中で、バランス課題時の体幹運動様式に興味を持ち、現在川原先生のゼミにて三次元動作解析機器などを用いた運動力

学的解析を中心とする研究活動に勤しんでおります。今まで主に医療側からの観点において解析を行ってきた私にとっては、解析を専門とされる川原先生が多角的な視点を与えてくださっていることや、他の院生もそれぞれが各分野でのキャリアを持っている為、より実践的且つ現場に活かすことの出来る意見を頂くことが出来、良い刺激となっております。また、他のゼミでも言える事かもしれませんが、川原先生をはじめ他の院生も気軽にディスカッションを行える雰囲気があり、業務の忙しい場合等でもweb会議も行っていただけのため、自分のペースに合わせて論文を執筆させていただいております。(田中和哉)



学習センターでのゼミにて

幅広い分野の学び合い

人間と文化コース・人文学プログラム 准教授 大橋 理枝

私のゼミに参加して下さっている方々の研究テーマは、コミュニケーション関係あり、異文化教育関係あり、英語教育関係あり、という具合にかなり広い範囲に及んでいます。分野が違って他の学生さんと一緒に学びたいというご希望が強いので、年何回か皆さんに集まって頂く場を設けており、ウェブカンファレンスシステムを使って遠方にお住まいの方にも参加して頂いています。分野を超えたコメントの交換がとても刺激的です。

これとは別に、主に日本語教育関連の研究テーマで修士論文を書かれている学生さんたちのゼミを、宮本徹先生と合同で年2回開催しています。こちらには2001年から10年間本学の日本語教育分野を担って下さった姫野昌子先生や、在学生の指導担当教員を務めて下さっている客員教員の先生方にもいらして頂き、毎回非常に貴重なコメントを頂いています。また

修了生の方々も多く参加して下さるので、半年に一度の同窓会のような雰囲気もあります。

どちらのゼミでも私の方が教わる事が多く、毎回楽しみにしています。

●学生の声●

大橋ゼミに参加することは、自らの研究を複眼的視野を持って吟味し、独りよがりになりがちな研究の方向性を修正し、次のステップに研究を進めるための鍵となっています。先生のポジティブなコメントや様々な研究の立場からの意見が聞けることは、将来展望への大きな収穫です。また、幕張に出向けない場合も、ウェブ会議でフォロー・指導してもらえることも、大橋ゼミの大きなメリットです。(宮崎景子)



2012年の夏のゼミにて

国際理解のために('13)

放送大学教授
(社会と産業) 高橋 和夫



高橋和夫教授

テレビ科目に比してラジオ科目は、当たり前のことながら映像が使えないのが不便である。しかし、それだけ聴く方の想像力に訴えることができる。いかに想像力を刺激すべきか。

答えは、音楽である。音楽番組かと勘違いされるほど多くの曲を番組で流した。ラジオを聞いている方が、音楽番組と間違えて聞いてくださればと淡い期待を抱きながら選曲した。音楽という想像の翼に乗せて、講義の内容の世界へと聴く方を連れて行きたいと狙った。

連れて行った先は、ゾロアスター教、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教などの宗教と、日本の領土問題である。科目は二つの部分に分かれており、前半が宗教、後半が日本の領土問題という構成になっている。いずれも、国際化の時代に、知っておいた方が良いでしょう最低限の知識である。相手の立場から見ると世界がどう見えるのか。それを想像する力を学び取って欲しい。国際理解のための鍵は、最初から最後まで想像力である。

英文法 A to Z ('13)

放送大学准教授
(人間と文化) 井口 篤



井口篤准教授

近年は従来の文法や読み書きを中心とした英語教育に対する風当たりが強くなってきています。「コミュニケーション」や「実用英語」を重視すること自体は歓迎すべき風潮ですが、その中でともすれば忘れられがちなのが、非母語話者の言語習得の根幹をなす文法学習でしょう。文法とは、一般に考えられているように学習者を規則でがんじがらめにするためのものではなく、むしろ、学習者を自由にするものです。「ネイティブはそのような言い方をしない」というフレーズが英語学習者に

及ぼす心理的圧迫感は甚大なものですが、私たち非母語話者は、そのような「経験論」にしたがっては太刀打ちできません。むしろ、公理や原則から出発するような「演繹的」な手法をこそまずは身につけるべきであり、種々の例外や特殊例などは後から覚えていくべきものです。そして、規則を身につけるために必要なのは、理屈や説明もさることながら、数多くの練習です。「英文法 A to Z」は、皆さんにそのような練習の場を与えることを目指しています。

リハビリテーション('13)

藤田保健衛生大学教授
(放送大学客員教授) 金田 嘉清



金田嘉清教授

遂に日本における少子・高齢化社会が現実のものとなってきました。世界全体で高齢化が進むなか、日本は諸国とは比べものにならないスピードで進行しています。日本は、2040年頃に高齢者人口がピークを迎え、国民の3人に1人が高齢者を占める社会が確実に到来します。さらに高齢化に伴い障害者数も急増することが見込まれます。そのなかでリハビリテーション(以下、リハ)医療は大きな役割を担います。リハ医学とは「活動の医学」であり、疾病や障害を

「活動」という視点から眺めます。例えば、病が完治した後、後遺症として残った麻痺した手足を使って日常生活を活動できるように医学的に介入します。従ってリハ医療は、すべての診療科で治療を必要とする患者が対象となるため、幅広い知識と技術が必要となります。「リハビリテーション('13)」は入門編として総論を概説しながら、実践的な知識、技術をいくつか紹介します。

認知心理学('13)

東京大学大学院教授 高野 陽太郎
(放送大学客員教授)



高野陽太郎 教授

この科目は、認知心理学の概論です。認知心理学は、人間の精神活動を解明するために、基礎的な研究をしている心理学です。環境についての情報を入力する「知覚」に始まって、重要な情報を選り分ける「注意」、情報を保存しておく「記憶」、情報を加工する「思考」、情報を伝達する「言語」などが主な研究テーマです。人間の精神活動がどのように行われているのかは、長いあいだ謎でした。しかし、コンピュータが登場し、コンピュータとの類比で、精神活動を「情報処理」として研究する認知心理学が誕生してから、精

神活動を実現する具体的な方法について、理解が飛躍的に進みました。一方、人間が特定の方法で情報を処理する理由を解明するためには、「進化の過程で、環境に適応して生き延びていくためには、どのような情報処理が必要だったのか?」という問題を考える必要があります。この科目では、「人間はどのような情報処理をしているのか?」という情報処理の観点と、「人間は何故そういう情報処理をするようになったのか?」という適応の観点の両面から、人間の認知を考えていきます。

マーケティング('13)

専修大学准教授 橋田 洋一郎 関西学院大学准教授 須永 努
(放送大学客員准教授) (放送大学客員准教授)



橋田洋一郎 准教授



須永努 准教授

マーケティングという言葉がだいたい市民権を得てきています。専門的な世界だけでなく一般社会のレベルまで広く普及していくのは、当該分野の研究者として喜ばしい動きと言えるでしょう。しかし仕方ない面も多分にありますが、言葉の普及とともに明らかに誤った意味でマーケティングが解釈されたり、明らかに小さくマーケティングの考え方が把握されたりする例も生じてきているように思われます。その意味で、マーケティングの骨格となる枠組みや考え方をコンパクトに説明した本講義の

価値は小さくないかも知れません。個々のキーワードを一から解説した点はもとより、対象としても製品・価格・流通・プロモーションの各戦略、戦略的マーケティング、消費者行動をはじめとする基本的な項目から、ブランド戦略、リレーションシップ・マーケティング、そしてソーシャル・マーケティングといった応用的な項目まで定められた時間のなかで網羅できるよう試みました。マーケティングにご関心のある多くの方々の受講をお待ちしています。

仏教と儒教—日本人の心を形成してきたもの—('13)

東洋大学教授 竹村 牧男 お茶の水女子大学教授 高島 元洋
(放送大学客員教授) (放送大学客員教授)



竹村牧男 教授



高島元洋 教授

私たちは、長い歴史の重層の上に形成された現代に生きており、案外、日々、伝統的な文化を呼吸しつつ生きています。芸術・デザイン・技術等において、一見きわめてモダンに見えても、実は伝統のなかにある事例をふまえたものであることがしばしばです。

そうであれば私たちは、自国の文化の伝統を深く尋ねることにより、自己の生を成り立たしめているものが明確に自覚され、より豊かに生きることができるよう。しかもそうした文化の根底にあるものは、やはり思想・理

念といったものです。本講義は、その日本の思想の歩みを、仏教と儒教を中心に、分りやすく解説しようとするものです。そこには実は、高度な哲学・思想が多彩に展開されています。

仏教も儒教も外来思想ですが、日本に受容される中で日本独特のものが形成されたのでした。そこに日本人独自の感性や霊性が反映されています。いったいその固有の特質はどのようなものなのか、そのことを皆さんと確かめてみたいと思っています。

歴史からみる中国('13)

東京大学准教授
(放送大学客員准教授) 吉澤 誠一郎



吉澤
誠一郎
准教授

現在の世界のなかで、中国が政治的・経済的に果たす役割は非常にめだつものになっています。そして、中国をなるべく客観的にとらえ直していく必要性もまた大きくなっているといえます。「歴史からみる」という接近法も有効な手段の一つでしょう。

この講義では、ほぼ時代をおって歴史の展開を見ていきます。特に注意したいのは、現在の中国は、長い歴史のなかで少しずつ形作られてきたものだということです。言い換えれば、何か歴史を通じて一貫した不変の

要素があるとは考えないのです。とく

に時代を遡れば遡るほど、今日の中国のイメージをそのまま当てはめるわけにはいきません。そのときに直面する意外性は、歴史について学ぶことの面白さにつながります。

担当するのは、阿部幸信先生、櫻井智美先生、そして吉澤の三名です。最近の研究成果を踏まえながら、わかりやすく講義していきたいと思えます。皆様がこの授業を通じて中国をみる視点を豊かにしていくことができるように願っています。

メディアと学校教育('13)

放送大学教授
(情報) 中川 一史 放送大学教授
(情報) 苑 復傑



中川
一史
教授



苑
復傑
教授

学校教育におけるメディアの活用、特に現在の学校教育での導入などが進むICT (Information and Communication Technology)との関わりについて基礎知識を幅広く扱います。情報化社会に身を置く我々は、情報通信ネットワークや機器、コンテンツとの関わりについて考えるとともに、教育の在り方が問われています。その実態と課題や展望について、考えていきます。

本科目では、5つの大項目に分かれています。学校教育とメディアの関わり、特にICT環境や活用の現状と課題について、「初等中等教育」「高等教育」「メディア

を活用した障害者のための教育」「教育に係る著作権の問題」「教育におけるeラーニングや学習コンテンツ」という構成で、学んでいくようになっています。学校教育について、まずは初等中等教育、高等教育という「縦のライン」にしたがって理解し、その後、障害者、著作権、学習コンテンツという学校教育とメディアをめぐる3つの重要なテーマについて「横のライン」に学びを広げていく構成になっています。多くの方々の受講をお待ちしています。

数学の歴史('13)

神戸大学教授
(放送大学客員教授) 三浦 伸夫



三浦
伸夫
教授

数学と聞けば、アラビア数字を用いた計算や記号操作を思い浮かべるでしょう。そのような数字、計算法、記号法はいつ頃成立したのでしょうか。皆さんが今までに勉強してきた数学は、すでに出来上がった、しかも証明が付けられた厳密な数学です。このような証明に基づく数学や数学的思考法は、人類にとって普遍的なものなのでしょうか。さらに数学は、文化的・社会的環境の中で、どのようにして生まれ展開してきたのでしょうか。そういった疑問を、本講義では歴史上の具

体例を示しながら解いていきます。

話の中心は近代までの西洋数学ですが、古代エジプト数学、中世アラビア数学、日本の数学なども取り上げ、西洋数学と比較していきます。さらに数学と戦争の関係、数学者の社会的地位、優先権論争、そして数学と女性などの話題にも言及し、多方面から数学の歴史を振り返っていきます。本講義によって、今までの数学に対する認識が広がっていくことを期待しています。

臨床心理面接特論—心理療法の世界—(’13)

放送大学教授 大場 登 (臨床心理学プログラム) 放送大学教授 小野 けい子 (臨床心理学プログラム)



大場登教授



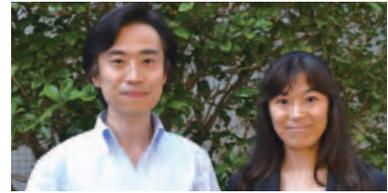
小野けい子教授

心理療法とは、さまざまな臨床心理学的症状を抱えた方々、症状は必ずしも持たれないけれど、縁あって自分を見つめざるをえない方々と、セラピストが1週間に一度50分なりの「時間枠」と、守られた「面接室」という「器」の中でお会いしてゆく継続的な「営み」と言ったらいいでしょうか。この「営み」が一旦開始されると、そして、そこに現れ出てくる世界に「開かれた」セラピストに支えられると、そこにはクライアントやセラピストの意図を超えた自律的な変容のプロセ

スが展開することになります。このプロセスは、生・老・病・障がい・死・家族・社会・性/セクシュアリティ・身体・暴力・力/権力・弱さ・嫉妬・怒り・痛み・悲しみ・悪といった、およそ人間存在に関わるあらゆる根源的で普遍的なモチーフに深くかかわりつつも、それぞれのクライアントとセラピストの出会いの中で創造されてゆく個性的なプロセスと表現することもできるようです。4単位30章科目です。

ことばとメディア—情報伝達の系譜—(’13)

放送大学准教授 宮本 徹 (人文学プログラム) 放送大学准教授 大橋 理枝 (人文学プログラム)



宮本徹准教授(左)、大橋理枝准教授(右)

人間はどのような方法でことばを伝えてきたのだろうか。

この世に生を受けてから死の瞬間に到るまで、人間はさまざまなことばを発し続ける。一方、そのようなことばのあり方は、それをどのように伝えるかという媒体の問題と切り離して考えることはできない。内容にふさわしい伝え方を取捨選択することは、私たち誰もがごく日常的に経験していることである。

ことばというのは人の内面、精神の問題であり、一方、それを伝達する媒体=メディアは優れて物理的な

存在である。この両者の間に横たわる緊張関係を歴史的視点から考察しようというのが本講義の目的である。取り上げる時代とメディアは多岐に亘るが、そこから照射されるのはいずれもことばとそれを紡ぎ出す人びとの精神のあり方そのものである。つまり本講義はメディア史を一つの“媒体”として、さまざまな地域と時代におけることばの諸相を明らかにしようという試みでもある。

ソフトウェア工学(’13)

法政大学教授 玉井 哲雄 (放送大学客員教授) 筑波大学大学院准教授 中谷 多哉子 (放送大学客員准教授)



玉井哲雄教授



中谷多哉子准教授

電話もテレビもデジタル化され、クルマも機械的な部分はどんどん減ってデジタル制御に置き換わっています。それを動かしているのはチップ化されたコンピュータの中にあるソフトウェアです。ですから、現代社会はソフトウェアで動いている、と言っても大げさではありません。

そのソフトウェアをいかに作りまた育てていくかという技術を扱うのが、ソフトウェア工学です。ソフトウェア工学は土木、機械、電気などの工学の老舗と比べるとずっと若い分野ですが、それでもコンピュータソフトウェアが作られるようになってから、すでに60年以上が経っています。この間、コンピュータハード

ウェアの進歩はめざましいものがあり、またインターネットに代表される通信技術と結びついてIT社会と呼ばれる現在に至っていることはご存じのとおりです。その中でソフトウェアの占める役割はますます重みを増し続けていますが、ソフトウェアは抽象的で目に見えないため、普通の人々の意識にはあまり登らないかもしれません。この科目では、その見えないソフトウェアを作るのにどのような技術が使われているかを見ることによって、ソフトウェアの面白さを伝えたいと思います。



「名誉教授称号授与式」を挙行

総務課

7月8日(月)に学長室において、昨年度3月末に退任された東千秋前教授及び熊原啓作前教授に対し、岡部学長より放送大学名誉教授の称号を授与しました。
今回の称号授与により、平成14年に名誉教授称号の制度ができてから、放送大学名誉教授の称号を授与された方々は24名になりました。

(前列左から)東名誉教授、岡部学長、熊原名誉教授
(後列左から)吉田事務局長、川合教育支援センター長、松村附属図書館長、小寺山副学長、來生副学長、吉田副学長



質問コーナーからのお願い

学生課

質問票をご利用いただく場合には、学生生活の葉に記載されており注意事項をご覧くださいからご送付ください。質問内容は原則として、現在履修中の科目について直接授業内容に関する質問とさせていただきます。履修中の科目でない場合または、直接授業内容と関係しない内容の場合には、回答が出来ない場合がございますので、ご了承ください。また、2013年度第1学期より、キャンパスネットワークからの質問票送付に添付ファイルを使用することができるようになりました。質問をする際の画面内で質問者ご自身の名前やメールアドレスを正確にご入力の上、必要があればファイルを添付していただき、ご送付ください。また、大学からの各種ご連絡もいきますため、メールアドレスを入力する際には、本学で付与している学生メール(G-mail)を是非ご活用いただくことをお勧めいたします。



放送大学エッセイコンテスト2013年度作品の募集

学習センター支援室

第6回放送大学エッセイコンテスト2013年度作品を募集しております。多くの方の応募をお待ちしております。

テーマ	「未来」※テーマに沿ったタイトルを自由につけてください。		
応募資格	放送大学の全学生		
応募内容等	①エッセイは、2000字以内。日本語で書かれたもの(未発表のものに限ります) ※ワープロ、手書きなど読み易い文字で作成してください。 ②エッセイ本文のほか、所定の応募票に、タイトル、氏名、学生番号、所属(コースまたは専攻・プログラム)、学生種、所属学習センター、連絡先(住所、電話番号、メールアドレス)を記入してください。なお、電子ファイルがある場合はできるだけメールでご提出ください。 ③応募数は、1人1編に限ります。また、応募作品は、返却いたしません。		
提出先・問合せ先	放送大学学務部学習センター支援室 エッセイコンテスト担当 (essay-contest@ouj.ac.jp)		
提出方法	メールまたは郵送	提出期限	2013年10月14日(月) 消印有効
選考・発表	選考委員会で選考のうえ、入選者には2014年2月中旬にお知らせするとともに、放送大学ホームページ等にて発表します。		
入選作品	最優秀1点、優秀3点、佳作6点(予定) ※入選者には、賞状及び副賞を授与いたします。また入選作品は、ホームページ、ONAIR等に掲載の予定です。		



詳細はキャンパスネットワークホームページ内の告知板「エッセイコンテスト」をご覧ください。

編集後記

本号は「卒業研究」を特集しました。放送大学では、卒業論文にあたる「卒業研究」は必修ではありません。それでも、多くの方が「卒業研究」を履修し、放送大学での学びの仕上げをしていきます。「卒業研究」は、自らテーマを決め、調査と分析によって論文を作り上げるものです。放送大学での学びの総決算であり、報告書であるとも言えます。「卒業研究」とはどのようなものなのか、指導する先生と、各コースで論文を書き上げた方々から、その楽しさと喜びとそして苦しさについて、現場の生の声をお伝えしていただきました。歴史学研究を始めて40年、いまだに論文を書くのに四苦八苦している我が身をふりかえり、内心忸怩としています。(吉田光男)

放送大学通信 オン・エア 編集委員(2013年度)

委員長 教授 島内 裕子
副委員長 教授 高木 保興
委員 副学長 吉田 光男
教授 宮本 みち子
教授 青山 昌文
教授 米谷 民明
准教授 岡崎 友典
准教授 森本 容介

編集事務担当

総務部広報課



放送大学

http://www.ouj.ac.jp/ ISSN 1343-3369

ご意見やご感想をお聞かせください。メールアドレス editor@ouj.ac.jp